

8 近藤 ゆり子

〔陳述〕

大垣市に住みます近藤と申します。揖斐川流域住民として、揖斐川の治水に直接利害関係のある一人として、建設省の示された治水計画に疑問を呈したいと思います。

資料がいろいろあるもんですから、委員の方々にはお渡ししましたが、傍聴の方々には済みませんが、その分用意してこなかったので、申し訳ありません。

揖斐川の治水計画というのは、最上流部の徳山ダムの洪水調節に過剰に依存しているのではないかという、非常に危機感を覚えています。建設省の河川砂防技術基準というのを読んでみましても、超過洪水に対しては被害分散をとということで、いわゆる一点豪華主義というんですか、一つの施設に非常に大きな分量の洪水調節等を期待するというのは必ずしもよくないというふうなことが言われているにもかかわらず、そこに矛盾するような計画が立てられているというのを、非常に不安を覚えます。

資料の1、2というのは建設省の出された資料なんですけれども、これを見ましても、治水計画全般が徳山ダムにほとんどと言っていいほど依存しています。いわゆる河道分担率というもの、河道と洪水調節用のダムなどでの分担率では、河道分担率61.9%、これは全国の主要河川の方でもかなり低い方です。例えば長良川は93.8%、もちろん長良川はダムの少ないところです。それから、ダムの数が非常に多い木曾川で78.1%、これが河道分担率が低いということはダムに依存しているということなんですけれども、揖斐川は、最上流部にも徳山ダムがつくられたとしても、たった2カ所の洪水調節用のダムで、河道分担率が非常に低い。つまり、徳山ダム一点豪華主義の治水計画である。このことは、揖斐川流域の住民としては不安を覚えます。

この計画を見る限り、徳山ダムを早期につくらなければ安全ではないからつくってくれということになってしまいうんですけれども、しかし、こういった一点豪華主義、徳山ダムに大きく依存する揖斐川の治水計画が妥当であるとはとても思えません。

例えば、1976年9月、大垣市内が水に浸かった洪水ですけれども、これは徳山における2日間雨量は282.7mmであって、100年確率というんですか、その2日間雨量395mmからすればかなり少ない量です。これをざっと計算しますと400 m^3/s の流水になるわけですが、常時放水200 m^3/s ということからいっても非常に大きいとは言えない。しかし、大垣市内は事実水に浸かったわけです。横山ダムだけでも1,080 m^3/s の洪水調節用の分があるということからいえば、この雨だったら十分に洪水は防げたはずですが、しかしそうっていない。徳山ダムがあつたら防げたということが、果たしてそのように言えるのでしょうか。

洪水調節用のダムというのは、最上流部に2カ所だけで支流にはありません。根尾川、粕川、それから牧田川にはありません。大雨が都合よく徳山ダムの集水域にだけ降ってくるといふわけにはいきません。その分は一体どうなるのでしょうか。そして、今までの

資料2 というところですが、徳山での2日間降水量と万石での基準地点、そこでの最大流量は必ずしもリンクしていないんです。徳山ダムから万石のようにダム地点と計画基準地点の距離が大きい場合は、ダムによる洪水調節が基準地点の流量に有効に作用するとは言えない。このような意見、学者さんの意見ですけれども、資料7に付け加えておきましたけれども、そういう意見があるということを審議委員の方も十分御承知おきいただきたいと思います。

それで、大体この治水計画ということで示された数字そのものが果たして正しいのでしょうか。基本高水流量、こういうものの設定というのは、非常にきつと科学的で、私たち素人が疑問を呈するようなことはないというふうに私は思ってきました。しかし、どうもいろいろな文献を当たってみますと、この基本高水流量の決定方法は、建設省内部でも河川ごとに違う。最大流量をとるとか、あるいは3番目をとるとか、さまざまな組み合わせでとるといろいろあって、その根拠というのが非常によくわからないんです。非常に悪く言えば恣意的、あるいは作為的というふうにも考えられます。この御意見については資料8に載せておきました。

しかし、それ以前に、計画の根拠としている数字にかなり妙なものが多いんです。資料2ですけれども、1960年8月と75年の8月の大垣市万石における最大流量は全く同じです。しかし、観測水位が1.25mも違います。後者の方が高いです。この間に横山ダムが完成して700万 m^3 の土砂が堆砂したんですから、河床が低くなったということはあっても、高くなったということはかなり信じがたいことです。もちろん、河道は極端に狭くなっていないし、特別に流水障害があったとも思えない。そうすると、結局のところ、非常にそのデータに誤差が多いのか、それとも非常に悪く言えば、数字の改ざんがあるのか、このような疑いを持たざるを得ないんです。

さらに、治水計画に欠かせない雨量の観測データ、これは治水計画は、計画降雨から治水計画を立てているということで、過去の降雨データというのは非常に重要なはずなんですけれども、資料2、3を見ていただきたいんですけれども、1959年9月の伊勢湾台風、これは以前の資料では徳山の2日間雨量ですけれども406mmが今回393mm、それから1975年8月の6号台風、直後の発表363mm、1980年ごろのパンフレット、これ現物が1部もないということで入手できなかったんですが402mmで、最近の資料では433mm、実に70mmも多くなっているんです。

こういった基礎的、一次的な観測資料の数字が変わるというのは全く信じがたいことです。過去にさかのぼって観測し直すということができないはずもないのですから、一体これは何で変わったんだろうか。複数の論者による意見によるとこれは伊勢湾台風よりも1975年8月の6号台風の方が雨量が多かったのに、横山ダムのおかげで助かったんだと。だから、揖斐川上流のダム計画が非常に有効であるということを通じての数字の改ざんだという意見、私が言っているんじゃないくて、数人の論者が言っているんですけれども、そういう意見というのも耳を傾けなきゃいけないのかなというふうに思います。

大体徳山ダムが治水のためのダムというふうに言われていますけども、それは本当なんですか。こういう徳山ダムに過剰に依存した治水計画、それから資料における非常に納得しがたい数字、こういったものは建設省河川砂防技術基準によって、徳山ダムの規模を最大限にとった、その最大限にとった結果から、逆に後ろからくっつけた数字合わせ、治水計画なのではないか、そういう疑いを持ってしまいます。

そもそもダムにおいて利水と治水は相反します。治水に限って言うならば、水は貯めない方がいいんです。しかし、利水においては貯めなければいけません。ですから、今までの多目的ダムというのも、結局利水用に水を貯めて、しかし雨が降る。そうするといっぱいになる。もうぎりぎりまで我慢したあげく、しょうがないから放水する。結果的に下流部で大洪水を起こす。こういうことは、残念ながら建設省さんは何回となくあちらこちらのダムでやってきています。

こういうことを考えると、ダムが洪水を防ぐというのはかなり疑問だと言わざるを得ません。こうした治水に数千億円のお金を投入する。治水ということだけに限っても 900億円以上というんですが、これは多分ずっと多くなると思いますけれども、これだけのお金を投入するならば、もっとよい治水の方法があるのではないか、それを検討すべきではないかというふうに私は考えます。

歴史的に、多数の公述人がおっしゃっていたとおり、この地域は非常に洪水の危険の多いところで、洪水と闘ってきた歴史があります。治水というふうに言ったら、治水なんか要らなんていう人はだれもいないと思います。しかし、治水は徳山ダムだ、治水イコール徳山ダム、これはどうも違う。そこに私は大きな声を発したいと思いますし、建設省の皆様方にも、審議委員の皆様方にも考え直していただきたい部分だと思います。

そもそもダムというのには、メリットというのはあるのかもしれませんが、デメリットも非常に多いものです。

一つは、放流による水害です。先ほど言ったようなものです。徳山ダムは、洪水調節用に1億 m^3 もありますから、とてもそんなことはないだろうというふうに思ってしまうんですけども、単純に計算すれば、例えば1965年の9月のような雨が降れば、非常な放流、900 m^3/s の放流となって下流に大きな被害を与え得るわけです。

建設省は、仮にダムが満水状態になって洪水調節が行われない場合でも、河川の状態はダムがない自然状態に戻るだけでありってなことを3月24日に九州地建が言っているようなんですけども、しかし、ダムによって水の流下のタイミングが変わりますから、これは自然状態と一緒にとは言えないんですね。結果的に自然状態よりもとんでもないことになってしまっているというのがダムの放流による水害の実態なんです。こういうことが現にとめられてない以上、せいぜい自然状態になるだけだと言っているのはちょっと怪しい。ダムは洪水を防ぐどころか、ダムが洪水を引き起こす、こういうこともあると思います。

ところで、この計算は、ちょっと 900 m^3/s とかいうのは、ちょっと悪く言えばいいかげんな計算です。なぜならば、これは集水域の土地の状態を無視したからです。後述します

けれども、治水の主要な部分というのは、実は土地の水の保全、そちらの方にあるのではないか。森林と土地利用にあるのではないか。治水計画の基となるハイドログラフというのも、土地の状態が変われば変わります。このことを主要に言うべきなのに、しかし、建設省さんの資料では、どうもそこはちっともわからない。そういった治水計画というのは、まず初めに徳山ダムがあって、それに従って治水計画があるという逆転現象なのではないかと思います。

それから、ダムによる危険ですけれども、徳山ダムの湛水域というのは活断層と重なっています。ダムサイト予定地の下には破碎層が存在します。湛水によって地震は必ず誘発されます。それが微小地震で済むのか否かの研究もしっかりと行われてはいません。資料4、5ですけれども、参議院でも質問があったんですけれども、明確な答えがなく研究されていないという答えです。こうした大地震が引き起こされた場合、ダムがあるための危険というのは何十倍にもなると思います。地震によって山が崩落すれば、ダム湖からのダム津波ということも考えられます。こういったことも含めて、非常な危険が伴う可能性がある。その可能性について十分検討されていない、このことを指摘しておきたいと思います。

最終的にですが、治水の根幹は森林の保水力に置くべきだと私は思います。旧徳山村の人の意見なんですけれども、わしらの子供のころは、雨が降っても水は濁らなかつた。川の水かさはゆっくりと増えて、雨が上がってもなかなか引かない、そういう状態だった。しかし、山の木を製紙会社に売ってしまってから、ちょっと雨が降るとあつと言う間に水が上がり、雨がやむとさつと引いてしまうと。濁つた水がぱつと増えてぱつと引く、そういうふうな状態になっている。明らかに山の様子が変わり、水の様子が変わったというふうにおっしゃるわけです。

森林を壊してしまった上で、さっきから言っているように、どうも当てにならない数字で計算した人工建造物で治水を行う、自然を制御をする、これが果たして正しいのでしょうか。近代科学が自然を制御するという意見の破綻というのは、私たちはこの間何度となく見てしまいました。これはダムに限りません。あつちこつちで、こんなはずはなかつた、万が一つにもあり得ないということが起こっているんです。人間の技術の過信というのが、結局自然からしつぺ返しを受けている。それは、かなり私たちは意識してしまいました。本気で治水を考えるならば、山の木々を育てて、実質的に遊水地にもなる水田を残すことにお金を使ってほしいと思います。河道を確保し、堤防を強化するのは当然です。

自然を破壊して巨大ダムをつくっても、本当に住民の安全を確保することにはなりません。治水の方法は決して一通りではないんです。土木工学ハンドブックというところの建設省の意見ですけれども、計画の規模を上回る洪水、計画高水位を上回る洪水が発生する可能性は常に存在すると御本人たちもおっしゃっています。ですから、さまざまな方法を組み合わせて治水をしてほしい。そして、それを住民に公開し、そして住民の意見を大いに聞いてほしい。そういうふうにあります。

〔質疑〕

○質問

一つだけ伺いしますが、揖斐川の流れている流れを山に向かってずっと歩いた経験があるかどうか。

それから、木曽川の例を引かれましたが、木曽川も山へ向かって歩かれた御経験があるかどうか、その点だけ教えてください。

○近藤公述人

揖斐川については、何度となく上流部の方に行っております。

木曽川については、必ずしも、部分的には行きますけれども、ずっとという形ではさかのぼってはいません。